



# 東海道行脚 (六)

田中好

幽邃高雅の美を有する蘆の湖の遠望は昔から文人墨客の間にあまり觀賞されてゐない、たゞ靈池ちや神池ちや、こ恐れ崇められてゐるだけだ、さいふのは鎌倉や徳川時代の道

路政策が、行旅の勞苦を慰めるに言ふやうな幽雅な觀念を持たないで、餘りに軍事に専らであつた爲に塹壕式の道路を拵へたので蘆の湖を遠望することが出来なかつたのだ、併し今改修された東海道は旅人が蘆の湖の自然美を觀賞するやうに、線形を選択した苦心の程が窺はれる。

神奈川縣と静岡縣との界には立派な縣界標が建てられてゐる、封建時代のやうに管内の土地は管内の人が支配せなければ氣が濟まなかつた時代は格別だが、土地所有者の所屬國籍を問はない今日では餘り境界標の效目も無い譯だ、夫れに之で交通が區別されるやうなことがあつては有難迷惑だ、誰か云つたやうに、交通に國境なし、ミ言ふ理想を實現せしめたい私には異様な感を起さした、しかし道路管理者が異つてゐるだけに道路の形式も違つてゐる、神奈川の切取法面や測溝は近代的の混凝土で拵へられてゐるが、静岡の夫れは芝附けや耳芝の裝置で造られた、が併し私の旅に一番願はしい路面は静岡の方が餘程旨く手入れされてゐる。

静岡縣も舊道を改良するに就ては成るべく舊國道を利用したそつだが、随分各所で舊道を見越つてゐる、昔から名高い山中新田の施行原にある接待茶屋も新道から見捨てられるところであつたが、故意か偶然かは判らないが恰度新舊國道の交叉點に位するところ、爲つて、今も昔のやうに旅

する人を無料で接待してゐる、何でも昔、江戸吳服町の豪商であつた加勢屋與兵衛ミ言ふ人、重荷を負つて往來する馬の勞苦を憐むで傳馬一匹に就て豆三合つゝを煮て施した、その動物愛護のこゝから接待茶屋が創まつたミ言ふこゝだ、その後中絶してゐたのを明治六年になつて、下總の人遠藤亮規、此處を通つて接待茶屋の由縁を聞いて再興のこゝを語つて西遊の途中近江の石部で死んだので、同氏の門人等が亡師の志をついで明治十二年此地に小庵を建て、往來する人に茶を薦め焚火を與へて行旅の勞を稿らふた、その後も之を經營する人は幾代か變つたが、創始者の加勢屋の旦那や遠藤某ミ同じ心根の人ばかりで今の經營者も誰であるのか、聞いても姓名を言つて呉れない、人の噂では静岡縣選出前代議士井上某ミやらが毎年若干の茶を寄贈してゐるミ言ふこゝだ、兎に角經營者は名を秘して社會奉仕に力めてゐる、利己乃至は功利主義、夫れが近代人の本能のやうに言ひ囃されるまきに、此淋しい山の中に營利を捨て、行旅の人を無料で接待し旅の勞苦を慮めるこゝは、何ミ美は

しい心根であろうか、萬金を積んで貴院に席を占めやうとする人達の心根も、幾何の相違があるのでしょうか。

美はしい人情味に絆されて坂を下る程に、あの天正の役に名高い山中城跡が三百有餘年前の衰れを物語つてゐる、三歳の童兒でも秀吉を知つてゐるやうが、一人前の人間でさへ接待茶屋の無名士を知らないであろう、こゝ考へて始めて人間の姿婆心功利慾が湧起するのであろう、秀吉の功利心の爲に犠牲に供せられた一柳直末の墓も、此處笠原新田に祭られてゐる、夫れが忠勇武烈の典型のやうに賞められ、破れて四散した北條氏が腰抜けのやうに言ひ離されて大閤の功利心を充たしたであろうが、忠勇武烈も腰抜けも今もなつては何の効果もない一將軍の詰らぬ昔物語りだ。

○

笠原新田から三谷、市山、塚原の新田を經、川原谷を通つて三島町に出るのが、徳川時代からの東海道だ、今も夫れに違ひはないが、享和年間にやつた彌次さん北さんの旅で

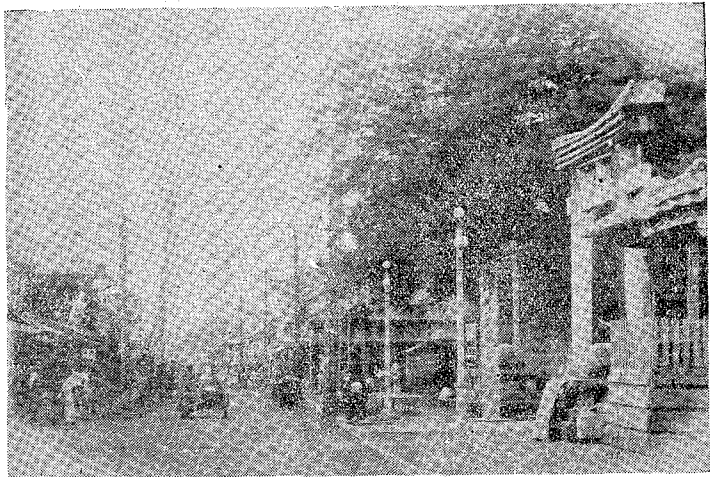
は、「國澤」云へるに至る、爰に法花寺といふ寺に足利武將の建立ありし七面堂あり、彌次郎兵衛遙に之を伏しおがみて。足利の武將の建てし名にめで、七面堂といふべかりける。」と詠んでゐる、國澤は今の玉澤の誤なのは確かだから、當時の東海道は玉澤を通つたやうだが、今の東海道川原谷には一里塚の跡があるばかりか、沿線老松の竝木は市山新田のものも少しも變つてはゐない、だから矢張り今のが徳川時代の東海道だ、彌次さん北さん、お前達は道を間違えたのか夫れも數奇にお寺詣りをやつたのか。

私の旅は三島宿まで來たのだが、振り返つてモー一瀧箱根路のこゝを考へたい、新國道は徳川時代の東海道に採線したそゝだが、夫れでも勾配やら屈曲の關係で新線を探つたこゝろもあつて、箱根と三島の間三里二十二町五十二間ものものが、今では四里三十二町二十四間に伸びてゐる、自動車の交通を的にしたら勾配や屈曲の完全なこゝは、一里やそこらの延長とは比較にならぬ、古來の險路を征服した人間力には敬服するが、此立派に出來た新道利用の効果を

考へて見たい、是で小田原だけから物資の供給を受けてゐた箱根は、三島からも供給を受けて新鮮な魚も喰へるこゝになつた、遠い興津や内浦邊の生魚までが東京へ直送せられるやうに爲つたのは、全く此道路を改良したお陰だ、曲亭馬琴ぢやないが箱根八里上流汗の苦は、富士屋自動車や東海自動車會社のバスのお陰で除くこゝが出来ても、夫れに依つて自動車會社が利益を獨占したり、生魚の運搬費が低下されても夫れが一般消費者に及ばない、短的に言ふと東海道改良の利益が一部少數者だけに歸するのは社會制度の缺陷だ、是を改めてこそ眞に道路改良の効果があると言ふものだ。

### 三 島

箱根を下つたところに位してゐる三島、昔から三島神社の三島か言はる、程名高い官幣大社三島神社鎮座の地だ、が併し此驛は延喜式に言はれる程古い物ではない、増訂豆州志稿の載せてゐるところに依るに、天平寶宇八年大

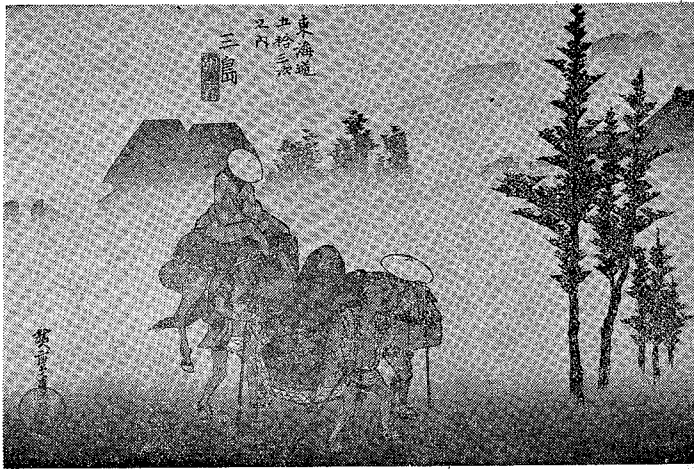


六四

現 在 の 三 島

伴宿禰伯麿を伊豆守として豆州を管轄せしめてから其の役所の在る所を國府と言つて、こゝ三島にも國府があつたか

ら三島を伊豆國府と言ふのだと記してある、驛の置かれたのは文祿の頃だ、それだから菅原孝標の女の更級日記やら



島 三 の 昔 往

鴨長明の海道記は、三島を通つてゐないが、東鑑が言つてゐるやうに三島神社を頼朝が祈願した勢であらう。東關記行は特に、三島に寄つて、「伊豆の國府に至りぬれば、三島の社の御しめ内拜み奉るに、松の嵐ごくらくおこづれて庭の氣色も神さびわたれり、此の社は、伊予の國三島大明神を遷し奉るに聞くにも、能因入道伊予守實綱が命によりて、歌よみて奉りけるに、炎旱の天より雨暴に降りて、枯れたる稻葉も忽に縁にかへりける、現人神の御名残なれば、ゆふたすき掛けまくもかしこく覺ゆ。せきかけし苗代みづのながれ来てまたあまくだる神ぞこの神。」と詠んだり、十六夜日記も「あはれみや三島の神の宮ばしただ此所にしもめぐり來にけり。」と歌つて三島神社の神徳を仰いで箱根路を辿つた、が併し之は東海道の旅に箱根路と足柄路とを自由に選擇する時代のことだ。

三島神社、今は町家の中に混して昔囃されたやうな神嚴

味を失つてゐる、東海道は今も社の前を通つてゐて、巾は四間程に改築されてゐるが、惜いこゝには側溝の設けが無いので、雨が降るこ路面は河になると言ふ話だ、三島明神の天徳が水にあつても海道を河にするのは明神の天徳を氏が濫用するものだ、神様に不似合な三島女郎、昔から海道沿にあつて旅人に言ひ囃されたものだ、彌次郎や北八の

旅の一夜は、「よねたちこ寝たる側には泥龜も恥しいやら指をくはへた。」こ色氣を消してゐるが、富士の雪こけ水で化粧する女郎衆、旅人に得意げに振舞ふたであらうが、今は海道筋から透ひ拂はれて町の角に籠つてゐるのも何だか氣の毒だ。

駿豆國境に昔から名高い千貫樋、東海道名所圖繪は説明して「伊豆の水を駿河へ取りて田園の料ミす、はじめ青銅一千貫をもつて水の料に贈りけるより此名あり、此所兩國の堺にして深さ三四間斗りの川ありて北より南へ流る、其の川を越へて東より西へ渡す箱樋あり巾一間餘長さ三十三間許なり。」と言つてゐる、こゝ千貫樋のある所、今旅す

る私には樋の昔を物語るだけの餘裕を興へて呉れない、夫れこいふのは悪路だからだ、悪路―夫れは狭苦しい四間半の東海道に駿豆電車が敷かれてゐる、夫れは未だしも此處樋のあるこころは新設軌道ミ併用軌道の分岐點となつてゐて民家の裏の方から電車が海道へ突入して來る危険さは、自動車の運轉手に冷や汗をか、すだけで無い。

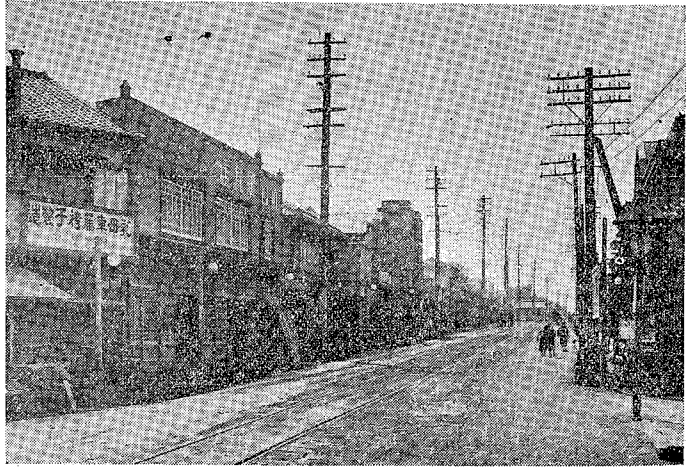
治承四年の頃、源賴朝が平家追討の軍を起したこ云ふことを聞いて、永らくの間奥州秀衡の許にゐた義經が軍を卒いて賴朝に初對顔したこ言はれてゐる。八幡、そこを經て木瀬川―昔の黄瀬川に出るのが今の東海道だ。

木瀬川、足柄箱根兩路自由選擇時代に此兩路が何處から分れてゐるかを調べてゐる私の旅には此處は随分大切な地點だ、海道記は、木瀬川の宿にこまつて萱屋の下に休み、今の竹下音の濕澤を通つて足柄路に出てゐるこゝを物語つてゐる、東鑑は治承四年十月二十一日、武將賴朝、令選

宿黃瀬川。ミ記してゐる、そのほか黃瀬川のこゝは随分色々な古書に書かれてある、そうするといつの時代に創まつていつの時代に閉された宿驛であつたかははつきり判らないが、平安朝の末期から鎌倉時代へかけての宿驛であつて、此驛で足柄箱根兩道が岐れてゐたことは疑ひない、足柄路は今の府縣道沼津御殿場線であつたのだ、箱根路も今の東海道であつたのだが、錦田村誌に依るに、箱根路もこゝ、木瀬川から岐れて三島町の北の方を通つて錦田村小澤から元山中の方に出て蘆の湖の西岸に出てゐたこゝもあつたのだ、當時は兩路の分岐宿として随分賑はつたであらうが、今は沿道人家數十軒を數へるだけの農民部落で、東鑑に記されてあるやうに頼朝の宴に狩り集められた遊女がゐるやうな、なまめかしい情緒は跡をも留めない、唯だ紀行や風俗史を通じて私等に榮枯盛衰の理を目のあたりに感ぜしむるだけだ。

## 沼津

こゝ、沼津、今は御用邸やら貴顯紳士の別荘があつて名高い土地になつてはゐるが、上古の東海道はこゝには眼をくれず遠く北の方を通つてゐた。藻汐草には「駿河國にはふじミ蘆立木の二つの山あり、此兩山の間は昔は東海道の驛略也、其のあはひに横走關云あり。」ミ記してゐて延喜式に謂ふ駿河國横走驛、今の駿東郡印野村に出て足柄にかゝつたのが東海道だつたのだ、更級日記も「辛うじて越え出でて關山にミ、まりぬ、これよりは駿河なり、よこばしりの關の傍に岩壺といふ所あり、えもいはず大きな石の四方なる中に穴のあきたる中より出する水の清きつめたき事かぎりなし」ミ言つて居るから、この沼津には延喜式時代の東海道が通つてゐなかつたこゝは明かだ、ミころか東鑑には「承久三年七月十二日、按察使卿光親去日出家法名西口者、爲ミ武田五郎信光預ミ下向、而鎌倉使、相ミ逢干駿河國車返邊依觸ミ可誅之由、於ミ加古坂ミ鼻之訖。」ミ記して車返一夫れは駿河雜誌か言つてゐるやうに今駿河郡沼津三枚橋町の北にある車返の小地名であるから今で言ふミ沼津で相逢つてゐ



津 沼 の 在 現

る勘定だ、海道記の筆者も「車返さいふ所をすぐ、此所はもし蟻螂か道にあたりて行人をさめるか、又もし遊兒が土

城をつくりて孔子にこたへけるか。』車返しの名稱を孔子を引き出して證議してゐる、東關紀行も「車返さいふ里あり



津 沼 の 昔 往



或家に宿つたれば、綱釣なぞ營む賤しきもの、住家によ、夜のやぎりありかこゝにして、床のさむしろも闕けるばかりなり、彼の縛戒人の夜半の旅寝もかくやありけんこ覺ゆしこ言つて車返宿に泊つてゐる、そうするこ車返驛—今の沼津は鎌倉時代から宿驛さ爲つたのだ。

徳川時代の旅路には、こ、沼津宿で泊るのか定例のやうだ。

あすはお立かお名残惜しや 送りませよぞ原までも  
原をうち越し沼津の茶屋で さすぞ盃いこまごひ

暇乞して笠手に持てば なぜか涙が先へ立つ。

文化年中に流行した俗謡だ、彌次喜多の連中も二十四文の酒こ三十二文の酒こ等分に割つて一合五勺はかり飲むでゐる、泊らないものだけは休憩だけでもした所で、宿驛として随分發展したのだから、三枚橋、昔から言ひ囃されたに似合はない下水溝に架けられた長さ一間許りの木橋だ、今の技術家に云はしめたら橋梁でない溝橋だと言ふだらう、餘りの貧弱さに研究して見たかつた希望も裏切られて

しまつた、が併し山王前の一里塚には、周圍丈餘の老榎が樹つてゐる徳川の盛時を思はしめる。

○

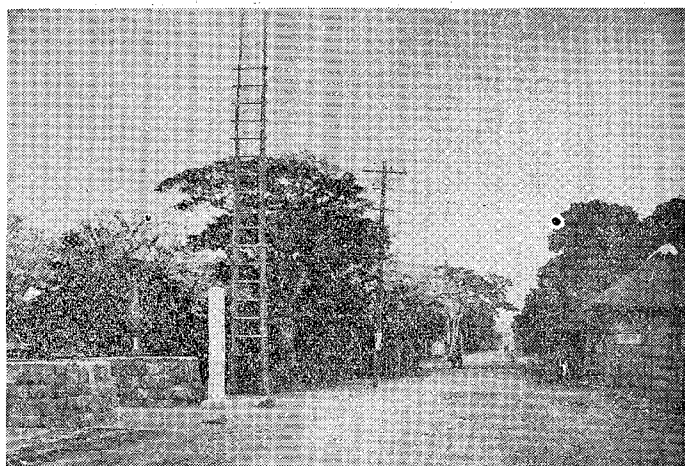
沼津、大正十二年に市制を布いて市さ爲つた、街路も割合に整頓してゐるか、私の旅する東海道は忘れられたものが、その巾は二三間にも足りない所があつて、電車が敷かれてゐる市道の方が餘程立派だ。夫れも市民の進んでやつた道路の改良でないのぢや、こ、沼津は不幸にも度々祝融氏に見舞はれ、夫れがいつも大火であつた、そのお蔭こ言つては失敬かも知らないが、罹災毎に道路は擴張されて六間巾の道路が随分多い、あれは何年の火事、これは何年の大火のお蔭で取擡げられたものぢやこ聞かされて、同情の心も起らないでは無いが、火災の前に方つて道路を擴張しておけば是程の災難に罹らないものぢや、こは私だけの所感であるまい、私は市民の無自覺さを憐みたい。

市街を出るこ東海道は鐵道東海道線こ並んで一直線に原

町に走つてゐる、兩側に聳えてゐる老いた松並木は昔から賞へられてゐる千本松原と競争してゐるやうに見える、この東海道は静岡縣には珍しい側溝が拵へてある、舊來の道路は桑の葉でもないのに隣接民有地から漸々蠶食されるので、道敷の境界を明確にするのと排水の爲に思つて測溝を築いたので説明を聞いたが、昭和の御代になつても三間巾の國道を維持することさへ八ヶ間敷言はれてゐるのに、三百年も昔に早や四、五間半の道敷を維持した徳川の大政は、今旅する私に流石は徳川幕府だつたか感謝せしめてゐる、鐵道東海道線は何と思つたか原町の手前で海岸へ出たので、東海道を平面で踏切つてゐる、直線道路にある鐵道踏切、いかに考へても路上交通の邪魔物だ。

## 原 町

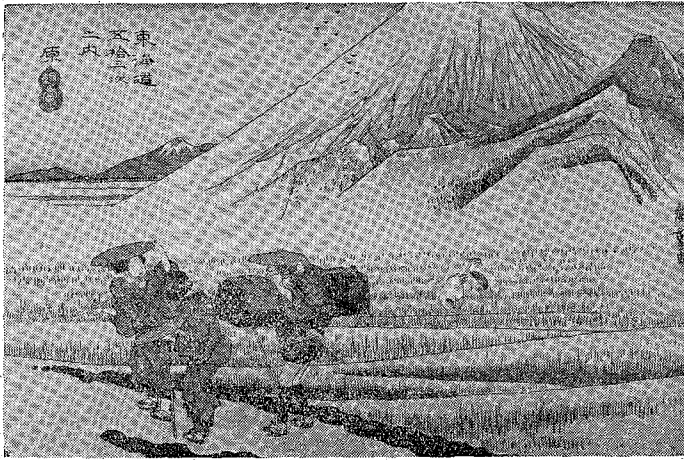
今の原町は東海道に沿つた一本筋の町だ、こゝが徳川時代の三十五驛の一つであつたかは疑はしい、駿州名勝志は「今の原驛は即浮島か原也、すべて原より吉原のあた



原 の 在 現

り迄浮島か原成へし、此邊古より廣原の地にて、浮島が原、柏原、吉原、蒲原等の名あり、原、吉原、蒲原を三原

こ稱す、原、吉原の間郊原の間に、小林丘三堆あり、此邊の土地洪水の漲るときは一面にうき立て水上の草野を見



### 原 の 昔 往

る、いにしへよりかゝりしにや浮島の名あり。』と言つてゐる。

浮島原、随分古へより人口に膾炙されたものだ、平家物語は、こゝ、浮島ヶ原で頼朝が二、三萬騎の勢ぞろへをして富士川の戦に臨んだこゝを傳へてゐる、海道記も亦「浮島が原をすくれば、名はうきしまし聞ゆれど、まこゝは海中こはみえず、野徑こは見つべし、草むらあり木の林あり、はるかに過くれば人煙片々絶えて又立つ、新樹程をへだて、隣たがひにうきし、東行西行の客はみな知音にあらず村南村北の道にたゞ四海を見る。』と言つて浮島が島でないこゝを物語つてゐる、東關紀行も「浮島が原は、何處よりもまざりて見ゆ、北は富士の麓にて西東へ遙々こ長き沼あり、布を引けるが如し、山の綠影を浸して空も水も一つなり、蘆刈小船所々に棹さして羣たる島多くさわぎたり、南は海の面遠く見たされて雲の波煙の波いこ深き眺めなり、すべて孤島の眼に遮るなし僅に遠帆の空につらなるを望む、此方彼方の眺望何れもまじりに心細し、原には鹽

屋の煙絶えく立ちわたりて浦風松の梢に咽ぶ、此の原音は海の上に沼びて蓬來の三の島の如くにありけるによりて、浮島ミなん名つけたりミ聞くにも、自ら神仙の住處にもやあらむ、いミ、奥ゆかしく見ゆ。「ミ言つてゐるが、夫れの感じを起さしめた所は今の東海道ではないのだ、浮島村役場備付けの古文書に依るミ、「當時根方街道は鎌倉時代の末迄は即ち古の東海道にして、東西の旅客皆此道路を通行せるものなりミ言ふ。」ミ記してゐる、そうするミ源光行や源親行の通つた東海道は、いまの府縣道吉永三島線であつたのだ。石川村には賴朝に靴を奉つたミ言ふ靴屋敷なミが残つてゐる、府縣道石川原線には男鹿塚女鹿塚の舊蹟が残つてゐるが、此處等の附近が浮いて見へたので浮島ヶ原ミ言ふやうになつたのだらう。

徳川時代になつて武女が庚子道の記では、「浮島が原より富士の山ちかく見ゆ、いたゞきには雲のたなびきて、肩のほこりより裾はすべてみごりに見ゆめり、今めきたるすそごの几帳なぞ立てたらん様の筆にも言葉にもいひつくしが

たきけしきなり。「ミ言つてゐるが、恐らく今の東海道を歩いたのだらう。享和年間の彌次や喜多八の旅行でも、沼津で泥坊に遭つて旅金を盗まれ、印傳の巾着を道連れの侍に賣つて旅金を拵へ、原の驛で蕎麥を喰つて。

今喰ひし蕎麥は富士はぎ山もりに

少し心も浮き島が原。

ミ洒落て新田の建場を通つて、名物饅の蒲焼に鼻の先きをひつこかしてゐるから、之も今の東海道を通つたのだ。

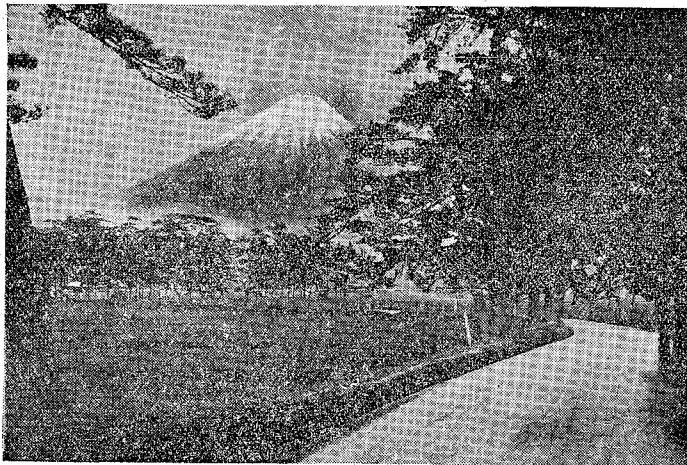
今の道は直線で専門家に言はしたら、さぞ線形が可いミ言ふだらう、併し此處は側溝の設けが無いので路面は滅茶だ、沿道の民地が路面ミは低いので、雨が降るミ沿道の村民達は路肩に堤を築いて路面の水が民地に流れて來るのを堰き止めるから、東海道は東海川ミ爲るそうだ、そこを、自動車能通过るミ村民は雨傘で跳る泥を受けて平氣で通行してゐる、側溝を造らない道路管理者も怠慢だが、他人の行路難を見てゐながら自分の土地ばかりを保護してゐる村民の仕業も呆れたものぢや。

須津村の東西柏原の邊は、上古柏原驛と言つたそつだが、夫れは延喜式にも載つてゐない、元吉原の邊、いよく道は悪い、東海道名所圖繪は今の吉原驛、此地にあつたと言つてゐる、草枕は「柏原新田、元吉原云ふ所をうちすぎ、行道のほぎ錦花緑草のたくひはいさも見へず、白き砂のみありて雪の積れるに似たり、」と言つてゐる、今は夫れ程の濱邊ではないが、昔は夫れ程の濱道だつたのだから、東海道の旅路では靈峰富士山も鼻に附くやうになるが、此處では昔から名高い左富士が旅する人を喜ばしてゐる。

## 吉原

吉原の驛宿なぞは延喜式に表はれてゐないが、夫れ以前には今通つて來た須津村の柏原に柏原驛があつた、貞觀六年その柏原驛を廢止して蒲原驛を富士川の東に移したが、その後蒲原驛を舊地に復して代るころの驛を設けた、夫れが鎌倉時代の見附驛で、是が吉原驛の始だ、が併し、當時此驛は東海道の道路には屬してゐなかつた、駿河名勝志

は、「古は足柄、清見、横走して足柄をこえ富士の麓を通り清見が關へ出る道に横走の關さて足高山の間にあり、按ず



原吉の在現



往昔の吉原

須走なり、是より甲州都留郡へ越る西へ行けば十里木越なり、御殿場村より西へ行事三里印野村といふ、村の中に谷川あり謂ゆる土岐の小川なり、此所即横走なりと土人いへり古へ關のありしは此地なるべし、相甲豆へすくる岐路なる故古は關ありしなるべし、十里木より吉原へ四里也」と言つてゐるから上古の東海道は、こゝ吉原より北へ折れて今の愛鷹富士の山麓にある十里木を通つて足柄へ越えたのだ。

徳川氏の慶長六年吉原を五十三驛の一つと定めたが、寛永十六年中吉原、いまの今泉村依田橋附近から津田附近に移轉した、元和二年新吉原に移轉した、夫れが現在の吉原町なのだ、東海道名所圖繪も此こゝを記し、此驛始はこれより東南の方にあり延寶八年八月六日暴風烈しく潮水滿上り津濤して家屋漂流し人馬溺死する事多し天和二年の春此地に移す。」と言つてゐる、隨分轉々した宿驛だ。

るに富士足高の間今も尙通路あり十里木越といふ、竹の下の南一里には、御殿場村あり、此處北へ登れば富士の東口

昔のこまは知らないが、今も田舎の町にしては相當に立派だ、大正の旅行者スター博士はこゝ吉原に人力車の無かつたのを咥いてゐるが商賣は可なり繁盛してゐるやうだ、海道も前後の夫れに比較しては可い方だ。

田兒の浦に打出て見れば眞白にぞ

不盡の高嶺に雪は降りける

山部宿彌赤人ばかりの富士感ではない、東關記行でも「田子の浦に打ち出で、富士の高嶺を見れば時わかぬ雪なれども、なべて未だ白妙にはあらず、青うして天によれる姿、繪の山よりもこよなう見ゆ、貞觀十七年冬の頃白衣の美女二人ありて山の頂に並び舞ふこ、都良香が富士の山の記に書きたり、如何なる故にかこ覺束なし、富士の嶺の風にたゞよふ白雲を天つ少女の袖かこ見る。」と詠てゐる。心細い旅をした阿佛尼も「心から下り立つ田子の蟹ごろもほさぬうらみこ人に語るな。」と歌つた田子の浦、今は東海道の南にあつて旅する人は唯だ其の名を聞くだけで訪ね人もない。

路面は悪いが平坦な海道に、こゝ加島で富士身延鐵道が亦平面交叉をしてゐる、街衢のうちにありながら踏切の表示装置も何もない、昔の富士川涉のやうに路上交通の危険地だ。

昔、源平の鬪に平氏が水禽の音に驚いた富士沼も、こゝ加島にあつたと言はれてゐる。東鑑は、治承四年十月十八日武衛（頼朝）及<sub>レ</sub>晚著御<sub>レ</sub>黄瀬河、以來廿四日、被<sub>レ</sub>定<sub>レ</sub>箭合之期、廿日、武衛令<sub>レ</sub>到<sub>レ</sub>駕島給、又左少將惟盛、薩摩守忠度、參河守知度等、陣<sub>三</sub>富士河西岸<sub>二</sub>而及<sub>二</sub>半夜<sub>一</sub>、武田大郎信義、廻<sub>二</sub>兵略<sub>一</sub>、潜龍伴陣<sub>後</sub>面之處、所<sub>レ</sub>集<sub>三</sub>千富士沼之水鳥等<sub>二</sub>群立<sub>一</sub>其羽音偏成<sub>二</sub>軍勢<sub>一</sub>之粧、依<sub>レ</sub>之平氏等驚駭、ミ戴せてゐるが、その驚駭さは平家物語の言つてゐるところで、旅する私は今その言葉を思ひ出して、「敵何十萬か有やらん取籠められては叶ふまじ、爰をば落ちて尾張川洲股を防げやきて、取る物もこりあへず、われ先に／＼と」

落ち行きける、あまりにあわて騒いで、弓取る者は弓を知らず、わが馬には人乗り、人の馬にはわれ乗り、繋いだる馬に乗つて馳すれば、株を廻るこゝ限りなし、その邊近き宿宿より遊君遊女も召し集め、遊び酒宴しけるが、或は首蹴われ、或は腰踏み折られて、をめき叫ぶ事おびたしし。その滑稽さは壇浦の悲惨さは違つて今も眼のあたり見るやうだ。

○

富士川、昔から旅する人を苦しませたものだ、業平の東下りは、こゝ富士川の難路を忘れたものか、富士山を詠んではゐるが隅田川に飛んで行つてしまつたが、寛仁時代に旅した孝標の女は「大井川といふ渡しあり、水の世の常ならず、すりこなごなを濃くして流したらむやうに、白き水疾く流れたり、富士川といふは、富士山より落ちたる水なり、その國の人の出で、語るやう、一歳ごろ物にまかりたりしに、いさ暑かりしかば、この水のつらに休みつゝ、見れ

ば、川上のかたより黄なるもの流れ来て、物につきてさまりたるを見れば、反古なり、さりあげて見れば、黄なる紙に丹して濃くうるわしく書かれたり、怪しくて見れば、來年なるべき國をも除目のごと皆かきてこの國來年あぐべきにも守なして、又そへて二人をなしたり、怪し淺ましし思ひて、さりあげて干してをさめたりしを、かへる年の司召に、この文の書かれたりし一つたがわず、此の國の守もありし儘なるを、三月のうちになくなりて又なりかはりたるも、この傍に書きつけられし人なり、かゝる事なむありし、來年の司召なごは、今年この山に、そこばくの神々あつまりて、爲い給ふなりけり見給へし、めづらかなる事に侍ふ、さ語る」さ言つてゐる。

海道記は馬で渡つたらしい「此河中にこそ石を流す巫峽の水のみ、なんぞ舟を覆がへさんや、人の心は此水よりさかしければ、老馬をたのみてうち渡る、老馬々々、なんぢは智ありければ、山路の雪のみにあらず、川の底の心もよく知りにけり。」さ馬を賞めてゐる、昔は随分川巾も廣く流れ



も急であつたか、阿佛尼の十六夜日記は「富士川わたる、朝川いこさむし、數ふれば十五瀬をぞ渡りぬる。」と言つてゐる、丙辰紀行では「船に乗つてわたるに渡し守ちからを出して、竿をさし櫓を押し出す時岸より見るものは、あはやま危うく思ひ船中の人は目まひ魂の消ゆる心地しにある。」と言つてゐる。加茂真淵も水嵩を心配しながら旅した

夜舟こぐふじの川に霧はれて

高ねにいづる月を見るかな

こ、渡河の無事を歌つた、彌次さん北さんは、いつに似合はない、「行く水は矢をいる如く岩角に、あたるをいこふ富士川の舟。」と詠むだ。

渡河の道具が人から馬へ、馬より船へ進歩したが、明治の御代になつても船から先へ進歩した施設を見なかつた。大正の御代に道路改良會がやつた東海道改良宣傳の自動車旅行でさへ、鐵道省へ無理を言つて富士驛から岩淵驛まで鐵道の御厄介になつたのだ。

併し是では交通要求が満足しないのは當然だ、そこで架

橋の計畫が樹てられ、大正十一年四月から二箇年四箇月の歳月を費し、八十五萬圓の巨費を投じ長さ二百十九間五分に互つて幅四間の鐵筋コンクリートプレートガーダー橋が架けられた、今の富士川の橋が夫れだ。併し富士川橋の前や先きの道路が徳川時代と餘り變ら無いのに橋だけが立派に出來てしまつた、此橋を渡る旅人は勿體ないやうな心地がするであらう。

橋の袖のところに水神社がある、東海道名所圖繪は水神の森について、「富士川右の山際にあり、巖上に松柏生茂れり、昔此川筋定らず或は岩本の下へ流れ、或は多數の支流と成つて水神の森河中の瀬なる事もありし故、其あたりの人此水難を歎きしに八十年前より長堤を水神の巖に築つたり、此以後水筋定りて洪水の時は此堤の内にて流水を堰へし故、水雍なし其のこを土人稱して袋堤といひならばしける。」と録してゐる昔から富士川の氾濫が激しかつたことを想はしめるが、併し夫れは此處の水神社のこころではあるまい。

勿體ないやうな富士川橋を渡るに富士川町の岩淵だ、此處には結構壯麗を極めた例の田中伯爵の邸がある。邸の前後の東海道は可なりの道巾に擴げられてゐるが、伯爵邸の横を通つてゐる東海道は徳川時代の夫れよりもまだ狭い悪路だ、道路擴張に反對したのか夫れさも道路敷地を拂下げたものかは判らないが、兎に角此處だけが前後の道幅に相應してゐないのは事實だ、そこに高塚を廻らして浮世イヤ活動社會を隔絶した生活振り、此道に車を牽かなければ喰へない人間の爲に少しは考へても可いだろうとは、旅する人の頭に浮ぶ感想だ。

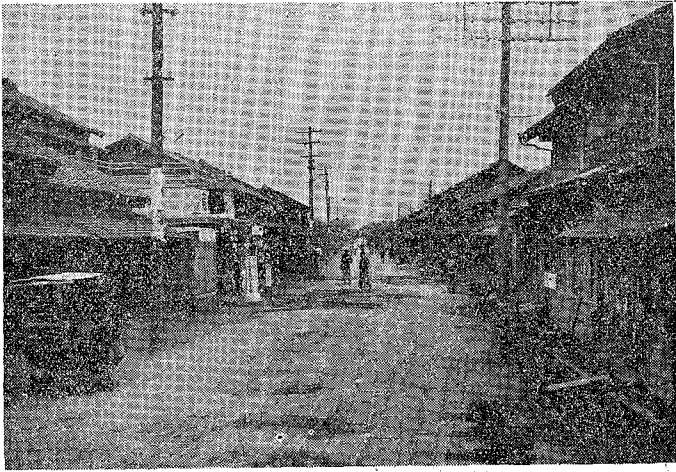
徳川時代の東海道は此處から先き簗下の部落を通つて蒲原に出でたのだが、多分大正の頃だらう態々東の方鐵道線路に並行するやうに變更されてゐる、舊道には坂路があるので平坦な鐵道測に持つて行つたのであろうが、其のお蔭で鐵道を二箇所も平面で横切つてゐる、低級な緩速車時代に試みられた一時的の思ひ附きであつただろうが、舊道に在る少しの坂路を平にさへすれば鐵道も無關心に交通が

出来るものを、ソーするに昔の人の方が先賢の明があつて探線したことも言へる譯だ。

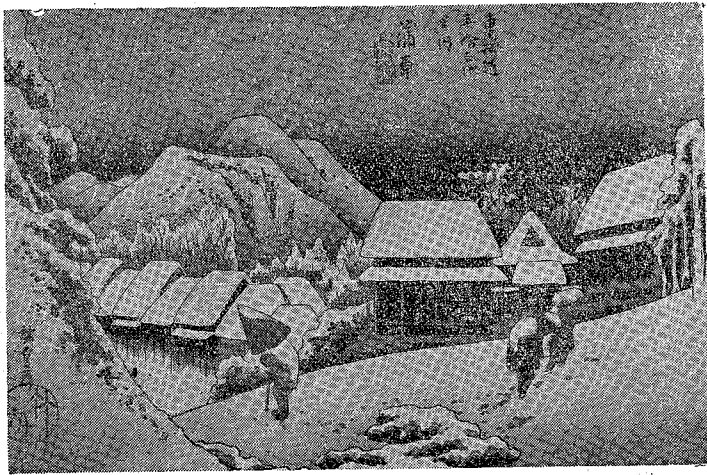
## 蒲原

蒲原——夫れは延喜式に出てゐる宿驛だが、宿驛の古いのと同じやうに東海道も路巾が狭いの屈曲が多いのは、ごいしても昭和の御代の東海道には思はれない位だ、此邊の東海道は山と海とに狭まれたところに在るので、古代から路線は變つてゐない、夫れを楯に路幅の取擴げが惱んでゐるそうだ、が併し新しい道を拵へるだけの用地はある筈だ、何とせなければ東海道の交通は此處等で阻まれるのだが、驛は先きに言つたやうに富士川が氾濫した爲に昔は川の東に移つた、茂加真淵の岡部日記は、午后八時頃にこゝ、蒲原宿について、此驛は貞觀七年に富士川の東の野にうつされるよし史に見ゆるを、一とせ川水いたくあふれて驛みな、がれければ、今の所におかれたるなり。と言つて今は舊の所に逆戻りしたことを物語つてゐる。

東鑑も、元暦元年七月十日、今日井上太郎光盛、於駿河蒲原驛、被誅。是依有同意千忠頼之間也。なき、録



原 蒲 の 在 現



原 蒲 の 昔 往

して蒲原のこを書いてゐる、海道記は此處蒲原の宿で「先  
後のあはれは行旅のならひにも思ひしられて」と言つて

旅つれの遅れた者を待つてゐる。

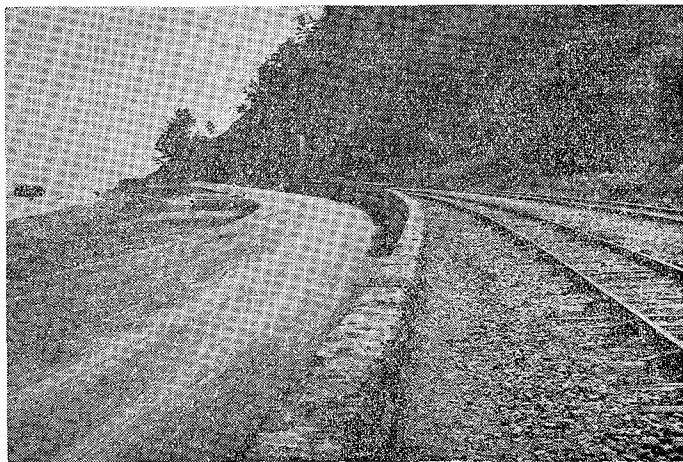
旅ごろもすそ野の庵のさむしろに

積るも著き富士の白雪

東關記行が蒲原の或る家に立ち入つたところが、その家の障子に書かれてあつた歌だ、之を評して「心ありける旅人のしわざにかあるらむ、昔香爐峰の麓に庵をしむる隠士あり、冬の朝簾をあけて峰の雪をのぞみけり、今富士の山のあたりに宿を借る行客あり、さゆる夜衣をかたしきて山の雪を思へる、彼も此も共に心すみて覺ゆ」と言つてゐる、阿佛尼は何處に泊つたか判らないが、「今宵は波の上さいふ所に宿りて、荒れたる音更に目もあはず」と言つて、旅する私に鎌倉時代の東海道旅行を想はせる。

### 由 比

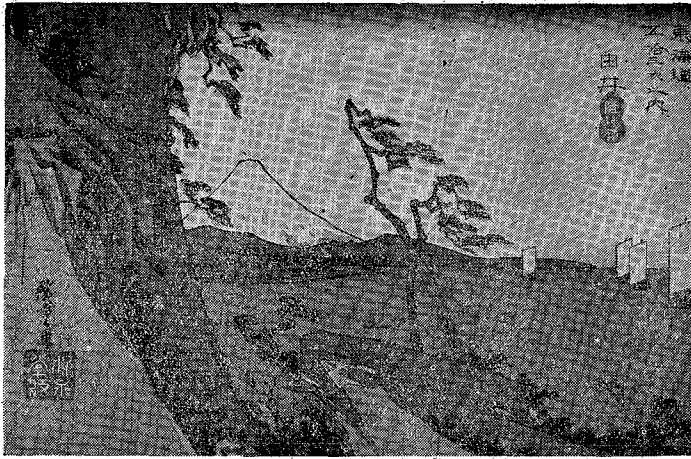
蒲原より由比までは鐵道線路に沿つた平坦な道だ、沿道人家は軒を並べて兩町の區域が判らない位だ、徳川幕府の逆謀者由比正雪が生れた所で名高い。



由比の町をはづれてからも海道は相變らず平坦だ、西倉澤の附近で道は鐵道を交叉して海邊に出てゐる、此處東海

現 在 の 由 比

道は山と海とに峽まれて昔から、八ヶ間敷言ひ囃された岫崎だ、海道記も「岫崎といふ所は風飄々翻りて砂をまはし



住 昔 の 由 比

波浪々々みだれて人をしきる、行客こゝにたづさはりて、しばらく寄引く浪間をうかびひて急ぎ通る、左は嶮岳の下岩のはざまをしのぎ行く、右はかすかなる浪の上をのぞめば眼うげぬべし」言つて恐ろしがつてゐるが、實際薩埵山と海に峽まれた箇所で俗に親知らず子知らず言はれた道であつたのだ、鎌倉時代の東海道の旅路で恐しがられたのも無理はない。

駿國雜誌の録する所に依るに、寛文三年御書院番頭、仙石因幡守久俊組柴田三左衛門勝興言ふ人が臺命を蒙つて薩埵山の道路普請をやつて其年十一月に成就したと言ふことだ、詰り親知らず子知らずの複道を拵へたが、明暦元年九月朝鮮國から官使が來朝して通行の安全を圖る必要があつたので、其の複道を東海道の官道に編入した、今の薩埵峠のある道がそれだ。林道春の丙辰紀行は薩埵山で尊氏直義が合戦したこゝを想ひ出して弟兄争國亂如麻、萬馬奔馳薩埵涯、一樹東西枝指後、海山風雨棗棠花、詠んでゐるが、道春は矢張り親知らず子知らずの道を廻つて、薩埵

山の舊蹟を詠んだのぢや。薩埵山、觀應二年亂臣足利兄弟の争があつてから潭山の歴史を持つのであろうが、今は大部耕されて茶畑になつてゐる。

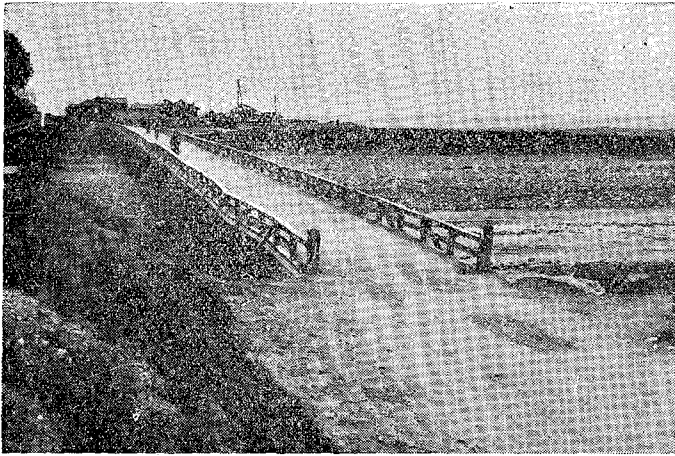
歸家日記の主人公井上通女は早や既に薩埵峠を越えたこ見へ、由井をすぎて薩埵山をこゆ、中比まで此あたりこよなう險しく、かたつかたは壁のごまく立ちたる山のかたつかたは海にて唯ほそき道一つなれば、人も馬もわづかにひこりこりならでは通り難し、親しらず子しらずこかいひて、親子こいへこ相かへりみる事あたはざりしこいふ、然るを近き世に、此山をかくひらき平らげさせ給ひて、萬の人のゆきかひたやすくなれるは、道廣き御めぐみなりかし。こ徳川氏の道路施設を喜んだ、が併しいまは夫れを亦換へて鐵道から海岸の方へ移つてしまつた、今の東海道が夫れだ、海岸に一層近いここに爲つたので路肩に浪除け堤を築いてはゐるが、天明三年六月洞村の海道を流したやうな海嘯が襲つたから、又候薩埵峠のある山道に變更する積りだらう。

## 與 津

興津川、食相な橋が架けられてゐる、夫れでも天正十八年頃迄は徒歩渡りであつたそうだ、興津川越立御定の次第を見るこ、右川二月上旬より十月下旬まで川越にて通路いたし、十月下旬より二月上旬まで假橋にて通路いたす。こあるから昔からの難所だつたに違いない、昭和の今日でも橋の上では自動車の行き違ひの出来ない難所だ、橋の悪いここやら屈曲の多い悪路だなんて言ふこ、天正時代の人からは贅澤だこお吐りを蒙るかも判らぬ、併し怖れて此儘にして可いのか知ら。

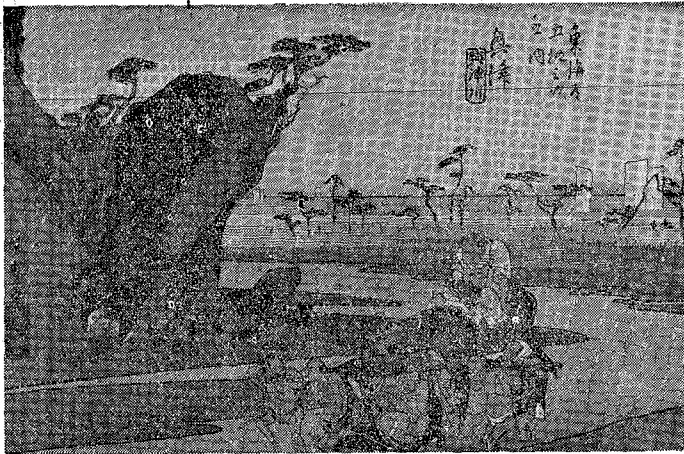
清見ヶ關や清見寺、随分昔から囃されたものだ、延喜式は息津の驛を設けてゐるが、古來こを旅した文人墨客は寺や關所を筆にした、海道記は、清見ヶ關を見れば西南は天こ海こ高低ひこつに眼をまぎはし、東北は山こ磯こ嶮難おなじで足をつまだつ、盤の下には波の花、風に開きて春のさだめなく、峰の上には松の色みこりを含みて秋を恐れ

ず、浮天の波は雲を汀にて、月のみふね夜出で、こぎ、沈  
陸の磯は盤を道にて、風の使脚あしたに吹きて過ぐ、名を



津 興 の 在 現

得たる所かならずしも興を得ず、耳に蹴る所かららずしも  
目にふけらず、耳目の感ふたつながら得るは此浦にあり、



津 興 の 昔 往

浪にありひてぬれくや口に道をこへば、松風むなしくこたふ、岸柳にくるしみを尋ぬれば槿花變じて石あり、關所の要害も風光の可いのを嘆賞した、十六夜日記も「暮れか、るほぎ清見ヶ關を過ぐ、岩こす波の白き絹をうち着するやうに見ゆる、いこおかし」荒浪の感興をしるしてゐる、徳川時代の東旅行で、林道春は、延暦の頃、奥州の逆賊

高丸、駿河國までせめ入り、この關に陣をこりしを坂上將軍打破りて高丸奥へ逃退きし事、久しければ語りも傳へ待らず、此處に寺あり、京なる惠日山の爾長老の弟子開聖の寺を開き清見寺と名づけ又は巨鰲とも言へり、近比妙心寺に屬するやうに侍る、「言つた、歸家日記の通女も薩埵山を越えて磯邊つたひに清見寺の門の前で休んでゐる、そ

うするミ鎌倉時代や徳川時代に歌はれた清見ヶ關、其のあつた所は疑はれてゐるが、最古は薩埵山の南麓にあつたのを、こゝ興津清見寺のところに移されたものと見るのが當つてゐるであらう。例のスター博士は、廣重の描いた斷涯のある所は唯だぼんやりとしたざるこゝしか出來なんだと言

つてゐるが、廣重は薩埵山の南麓を書いたので、夫れを窮ふのなら清見寺のある所迄來ては駄目だ。

清見寺の門、いまは清見關跡であると言はれてゐる、が併し明治の御代その門前のところに鐵道が敷設されて、私の旅する海道とお寺を絶縁してしまつた、道は昔より可い四間巾になつたもの、舊蹟を尋ねる人には心なき業よこ憾まれてゐる、明治の末より大正昭和の御代にかけて、政界の支配者西園寺公がゐる言ふので、政界異變のあるこゝに興津詣てが競争され、今は唯だそれだけで人口に膾炙されてゐるのに過ぎない興津だ。



此處から先の東海道は随分變つてゐる、今の海道は江尻に寄つて鐵道線路に並行して有度村中之郷やら豊田村の柚木を通つて靜岡に出るのであるが、夫れは江尻の湊と靜岡とを結ぶ道を慶長年中に東海道の官道とされたもので、文治年中から天正までの東海道は袖師村峯附近から今の海道

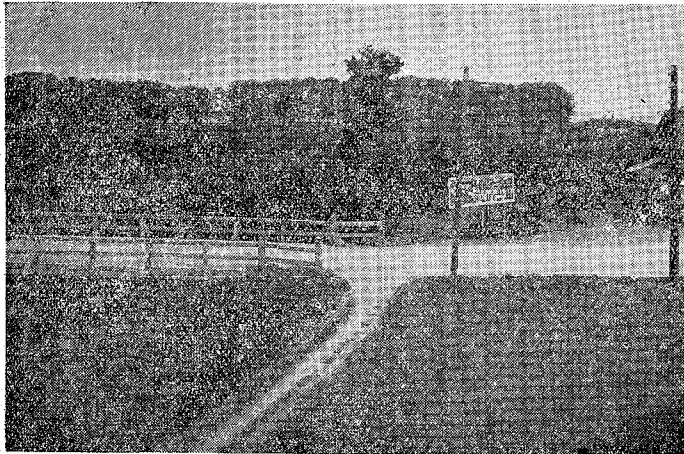


と岐れて、高橋や瀬名川の部落を通つて千代田村足洗や沓ノ谷を縫ふて國府、いまの靜岡に出てる俗に北海道と言はれてゐるのが東海道だつたのだ、更級日記の主人公菅原孝標の女が通つたところも此處なのだ、夫れに貞應年間に旅した源光行は、「江尻の浦を過ぐれば青苔石におひ黒布磯にはる、南は澳の海、森々波をわかして孤帆天にさび、北は茂松鬱々枝たれて一道つるをなす。」といつたが關東往還記は瀬名川宿中食記して瀬名村瀬名川を通つたこゝが明かだ、で海道記は江尻の遠望を賞めたのだらう。

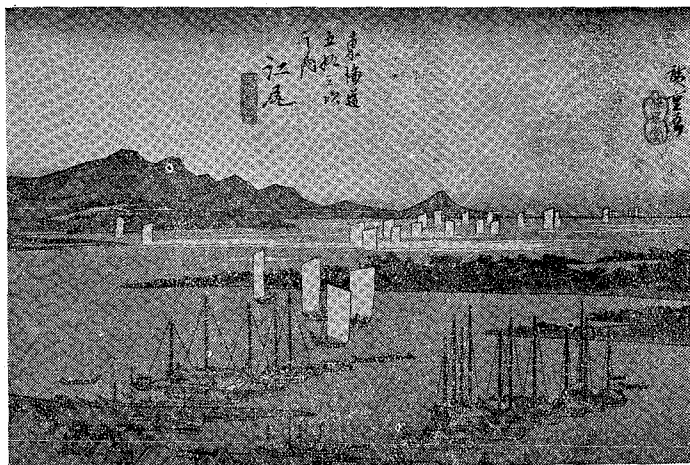
## 江 尻

夫れであるから慶長以前の宿驛書に江尻があろう筈がない、信長記は天正十年四月十二日信長公江尻宿御泊記してゐるが、夫れは今の江尻ではない、駿國雜誌が録してゐるやうに「江尻宿の本所は辻村の本郷なるべし、其の謂は往古よ北海道を以て往還す、此地北海道ニ庵原郡家の湊

道ニ十字街をなす、故に辻云ふか、位であるから信長の泊つたのも江尻さと言ふもの、辻村のこゝだ。この事は駿



現 在 の 江 尻



往 昔 の 江 尻

陽名君年代記に詳しいこゝを言つてゐる、「往古の江尻驛は横砂村高橋村船越村の川通りなり、永祿の頃迄の驛は本郷

より辻あたり也、天正十九年春小芝櫻小路の戌亥より向へ渡船して駿府へ通る、此時今の元宿ニ云所に驛を引く、大阪より道筋奉行下る、云々、元宿の西海船橋川の岸へ船渡して入江山明通寺門前通り、上野原へ出て駿府へ通る、慶長十二年春神祖命ありて七日市場へ大橋をかけ、追分上原を通り駿府横田迄驛路さなる。此時までは今の驛は巴川の下續きにして悉く蘆原也。」と録してゐるから江尻の發展は徳川幕府のお蔭であつたのだ。

歸家日記は「江尻を出て、行き、狐崎を過ぎて梶原がむかしを悲しむ。」と言つたが夫れは徳川時代の東海道の旅路だ、彌次さん喜多さんも此道を通つて、馬ア取つた旦那馬士の駄賃話しに氣をさられて歩いた所だ。

東海道に遠ざかつてゐた清水の港、夫れには静岡から湊道が拵へてあつたのを東海道に奪はれても、まだ宿驛にはして呉れなかつた、夫れどころでは無い、明治になつて鐵道が敷かれても此處清水には立寄つて呉れなかつた、が併し港灣を持つてゐるのが何よりの強味で、静岡から電車が

敷かれた、町は港を背景にして益々發展するばかりだ、昔は宿驛ちやと言つて意張つた江尻も、大正十三年に清水に吸収されてしまつて清水市に爲つた、變れば變る世の中ぢや、江尻の連中は言ふであらうが、可い港を持つ強味には何とも致し方が無からう、今は静岡の爲には無くてはならぬ港灣だと言はれてゐるが、改良工事が済めば静岡も亦吸収される程の勢だ。

清水と静岡、六ヶ敷し言葉を籍つて言ふなら唇齒輔車の

關係を持つてゐて交通は頗繁だ、歸家日記の主人公や彌次さん喜多さんの通つた東海道では到底間に合はない、夫れに狭いところに清水の爲めには恩人ではあらうがボロ電車が動いてゐる、省線鐵道が厭言ふ程東海道と平面交叉してゐる、鐵道と電車の爲に己れの本能を失つてゐる東海道だ、夫れで永い間地味なお役目を勤めた東海道を捨て、今歳の四月から北の山手の方に附替へることに爲つて、盛に工事を急いでゐる。